

【高等学校の部】 優秀賞

山が繋いだもの

大分県立大分上野丘高等学校 3年

首藤 友里

私は小学生の頃、父親と車で出かけることが好きだった。父は日曜日の度に私を連れて山や海へ行きいろんな景色を見させてくれた。その中でも私の記憶に残っていることは父と山登りをしたことである。

ある日曜日、父はいつものように私をドライブに連れていってくれた。その日は中津まで行く予定だった。私は車の中で学校であったことや友達のことなど他愛もない話をした。父は仕事の関係で帰りが遅いため、私が父と話せる時間は父が運転してくれているこの時間くらいしかなかった。でも私は父と話せるこの時間が大好きだった。父と話しているとあっという間に時間が経った。目的地に着くと、父は突然「まだ時間もあるし山にでも登るか」と言い出した。山登りの経験もなく軽装だった私は、最初は気が乗らなかったが、渋々父の意見を汲んで山へ入った。登っていくうちに自然に囲まれた非日常的な景色が新鮮で、また父とたくさん話せることが嬉しくて楽しかった。見渡す限り緑の世界が広がる山道は私にとって初めての光景で、植物や昆虫など目新しいものばかりだった。しかし歩き進めると段々と足場も悪くなり、疲れも感じ始めた。そんな時も父は私が退屈しないように話続けてくれたおかげでなんとか頂上に着くことができた。頂上から見る景色は雄大で今でもはっきりと思い出せるほど素晴らしいものだった。眼前には青々とした木々がざわざわと揺れ、登る苦勞も忘れさせるような清々しい風が吹いていた。登りきったことの達成感は大きく、登ったことを後悔させないような、そんな景色だった。私自身もこの山に登ってよかったと心の底からそう感じた。

こんな経験から今ではもう8年ほど経った。中学校に入学してからというもの、部活や勉強が忙しくなり、父と話すことも一緒に出掛けることもほとんどなくなった。父から「ドライブに行こう」と誘われても宿題があるからと断わるようになり、友達との遊びやSNSの方が楽しく感じるようになった。父との距離も当時ほど近くに感じなくなった今だが、今回大分の自然を思い浮かべた時、最初に思い出したのは父と登ったあの山の景色だった。父とたくさん話せて楽しかったこと、景色が壮大で自然に触れることができたことは忘れられない。

来年の春、私は大学生になり両親の元を離れひとり暮らしを始める予定だ。両親と一緒に暮らす残りの時間を考える度、もう一度父とあの山に登りたい、そう思う気持ちが強くなった。父との思い出が詰まったあの山だったら、あの時のようにまた父と話せるかもしれないと思っているからだろうか。今度は私が父に、「また山に登ろうよ」と誘いたい。そしたらまた父と昔みたいにたくさん話して楽しい時間を過ごせると私は信じている。父とあの景色をもう一度見たい、そんな期待を膨らませると、父と登った自然豊かなあの山は私にとって大切な思い出の場所であると同時に、父と私を繋いでくれた場所であることを痛感させられる。父と私を繋いでくれたあの山や自然を、これからも大切にしていきたいと強く思う。そして、あの山の雄大な自然が保たれ、多くの人の思い出を繋ぐ場所であり続けることを願っている。